

平成 21 年 6 月 5 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2008
課題番号：18520055
研究課題名（和文） <いのち>の意味—宗教・教育・精神病理学の立場からの協働的再検討
研究課題名（英文） Significance of Life (Inochi)—A new collaborating Research from the Viewpoint of Religion, Pedagogy and mental Pathology
研究代表者 藺田 坦 (SONODA TAN) 仁愛大学・人間学部・教授 研究者番号：40047072

研究成果の概要：日本語の<いのち>という表現には、単なる生物学的な「生命」、「生きている」ということだけではない、独特の含意やニュアンスが含まれており、それは宗教における「生死」の自覚、教育における苦悩やメモリー・モリの意識化、さらに精神病理における「正常なところ」の意義づけと不可分に結びつき、そこから<いのち>の尊厳や内実を考えることの必要が明確化された。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,100,000	0	1,100,000
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	300,000	2,400,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：宗教哲学、教育学、精神病理学

1. 研究開始当初の背景

人間の<いのち>（生命）をめぐって、さまざまな問題的事態や現象が次々と起こっていることは、現代の、あるいは昨今の世情の際立った、また驚くべき現実である。

一方では、毎日のテレビや新聞で報道される事件や問題はまったく異常であり、凶悪な殺人や殺害といったことが、次々に、しかもいとも簡単に行われている。日常的な生活の次元での生命の（とくに他者の生命）軽視は、まさに信じがたいものである。さらにまた、わが国における成人自殺者は年々驚くべき数（約3万人）に達し、しかもなお増加の傾向

にある。自殺者の追い込まれた状況はそれぞれに特殊であって、いちがいに軽々しく生命の軽視ということは憚られるが、結果的にはやはり（とくに自己の）生命の軽視という傾向があると言わざるを得ない。

他方ではしかしまた、現代の人間にとって、生命、つまりは生き続けること（死なないこと）が何よりも大きな関心事となり、長寿であることがいわば国家的目標とされ、延命治療が医学にとっての至上命令であるかのごとき風潮が支配的である。長寿あるいは健康保持、少なくとも病苦に悩まされない健康志向が中高年の人々にとって第一義的な意味とな

り、そのための手段や方法を求める傾向は、日常的な行動や経済活動のうちにも大きな比重を占めている。あえて言うならば、今日の一般的风潮は、生命の、しかも長寿ないし健康に生き続けることの、至上視ないし過大視と言うべきものになっている。

要するに、現代の傾向として、一方では極端な生命の軽視が見られるとともに、他方では過度とも言える生命保持ないし延長への要求が当然のこととみなされている。しかもこの両面は、ある意味では相容れない矛盾的な現象でありながら、現実にはいずれもが行われているのである。

健全な生命（いのち）の保持・延長、つまり健康と長寿が望ましいことは、改めて言うまでもない。人は誰も長生きして、しかもできるだけ健康を保持したいのである。しかしまた、人間はただ生物学的に長命を保ち、一瞬でも長く生きていればいいのか。あるいはできるだけ老化を先延ばしし、ともかくも生きていける健康を保持すればよいのか。現代における、ある意味での過度の生命維持ないし延引の治療や処置に対する疑義や反省は、昨今の生命倫理の議論のうちでもさまざまな仕方で提出されてきている。ただ生きるだけではなく、生きることの内実、つまりは生命の質（Quality of Life）をめぐる議論も、しばしば学問的なレベルで話題にされるようになってきている。

2. 研究の目的

このような時代状況のもとにあって、単なる即応的な対応策ということだけでなく、もう一度、人間にとっての<いのち>ということの意味について考え直し、異なった角度や視点から真の意味での「生命の尊厳」ということを再検討せんとするのが、本研究の目的である。人間が「死への存在」であり、生と死との相応関係のうちにあることを考えれば、生命の維持や延引の際に見られがちな単なる死の忌避、死の直視からの逃避ではなくて、むしろ人間にとってまぬかれたい死をまともに見据えながら、人間の<いのち>の意味や真の尊厳、正常な「ところ」の回復やあり方を探り求めることが必要となろう。

<いのち>と訳される、原語の life（英語）や Leben（ドイツ語）は、日本語ではほかに生、生命、生活、生涯などと、さまざまに訳出され得る。しかしこれが<いのち>と訳出される場合、そこには単なる生物学的な、あるいは日常的な「生きていること」、「生命を保持している

こと」だけではなく、いわばそれに付加される何らかの価値ないし意義が示唆され、含意されていると考えられる。そのような付加的な価値や意義が見出される場所に、まさに<いのち>の尊厳と、その内実の質や度合の差異を語ることも可能となるのではないか。このような<いのち>の価値や意義となるもの、いわば<いのち>の生きがいとみなされるものを見出すために、相異なる学問的な観点に立つものが相互に協働し、互いに議論を交わすことが、本研究の共同研究としての目指すところであり、またそこから何らかの成果が期待される地点である。

3. 研究の方法

以上のような目的と成果を目標として、本研究においては、通常あまり直接的には関わりをもたないとみなされる、三つの異なる分野の研究者による共同の（協働的な）研究という方法をとった。

研究代表者の菌田は、主として宗教学ないし宗教哲学の研究に携わってきたが、真の<いのち>の付加的価値や意義を探るための手がかりとなる哲学的思想として、たとえば M. Scheler や P. Tillich などの思想の検討吟味を通じて、新たな理解を開く可能性を探り、そこから広く宗教のうちに見られる生命観、とりわけ仏教的な根源的生命（いのち）についての教説を中心に、現代における人間の<いのち>の意味のよりどころを明らかにすることを試みた。

分担者の宗は、これまで長らく教育学ないし教育臨床学の現場の研究を続けてきたが、宗教教育への関心から、現代の人間（とくに青少年と老年者）に対する<いのち>の意味をいかに教示し教育するかという問いを、フランクフルトやヤスパースの思想、教育人間学の諸問題、さらには仏教への関連から探求することを目指し、メント・モリ（死を忘れるな）の思想を踏まえた「苦悩」の意味を、人間教育の基礎とする、<いのち>の意義づけを明らかにせんと試みた。

さらに分担者の三脇は、精神病理学を専門とするが、「正常なところ」をもって生きることと<いのち>の意味との深い関連を探求するために、とくに現代における精神療法をめぐって注目されているあらたな制度的思考の必要性を明確にするとともに、その具体的な内実と意義についての解明を試みた。

それぞれの関心と問題意識は、相関連し、重なり合うところがあるとともに、もちろん相異

なり、噛み合わない点も多々あったことは事実である。しかし、相互のたびたびの意見交換・議論によって、それらが決して無関係のものではなく、今後とも協働的につき合わせて考えていくべき内実を含んでいることも明らかとなった。ことに平成19年度の会合で、研究補助者として参加いただいた京都大学の多賀茂氏によって行われた講演「病院環境をめぐる哲学——機能評価から制度分析へ——」とそれをめぐる論議は、そのためのきわめて興味深い、また有意義な機会となった。四名での議論・検討は本研究の課題の重要性と、今後の展開の方向性をも示唆するものであったと言えよう。

4. 研究成果

本研究の成果は、先の概要においても述べたように、日本語における「いのち」という言葉によって示される意味と、そこに込められている独特の含意とニュアンスを改めて浮かび上がらせ、現代におけるそれらの再認識の重要性、必要性を示唆することができた点にあると言えよう。身体的存在としての人間にとって、長寿と健康が望ましい、また基本的に不可欠な事態であることは言うまでもない。しかしまた心身のバランスのとれた、したがって「正常なところ」を取り戻し、真に充実した「いのち」を生きることこそが、人間にとって課せられた課題であり、意義であることも明らかとなったであろう。そのことの現実的な方途と方向性がある程度提示されたことも、本研究の成果であると言えるであろう。

本研究の成果は、今後その展開・発展をも含めて、さまざまな形での公開と活用を図っていききたいものと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計10件)

- ① 藪田坦、<根源悪>について —原罪と宿業—、仁愛大学研究紀要、第5号、1～10、2006、査読無
- ② 宗孝文、人となること —意味への気づき—、ひかりといのち (りゅうこくブックス)、第113号、77～112、2007、査読有
- ③ 三脇康生、「アート・戦争・精神医療 —クレーの教えるもの—」、21世紀COE人文科学研究拠点成果物、8～14、2006、査読無
- ④ 三脇康生、「解離性健忘を生じた小学校の教師の治療の為の制度改編派精神療法」、仁愛大学附属心理臨床センター紀要、第2号、47～53、2007、査読有
- ⑤ 藪田坦、中世ヨーロッパにおける宗教間理解の哲学的基礎、早稲田大学科研費報告書 (代表 八巻和彦)、47～56、2007、査読無
- ⑥ 宗孝文、考えることと知ること、対話が授業を変える (コラム)、2008、14、査読無
- ⑦ 三脇康生、精神科医ジャン・ウリの仕事——制度分析とは何か、『思想』、998、43～60、2007、査読有
- ⑧ 三脇康生、分岐点に立つフランス精神医療、『こころと文化』、7-1、34～46、2008、査読有
- ⑨ 藪田坦、「日本的靈性」をめぐって——スピリチュアリティの根源、『日本の神学』、47、9～30、2008、査読無
- ⑩ 宗孝文、よく考える力と、かかわりを大切にする力、『対話が授業を変える』富山大学人間発達学部編、30-31、2008、査読無

[学会発表] (計4件)

- ① 藪田坦、(特別講演)「日本的靈性」をめぐって——スピリチュアリティの根源——、日本基督教学会第55回大会、2007.9.20、京都大学
- ② 三脇康生、ジャン・ウリの博士論文「美

的努力」、第39回 芸術療法学会、
2007.10.27、明治学院大学

- ③ 宗孝文、(講演) “苦悩”の意味について
中部人間学会第8回大会、2008.12.6、
仁愛大学
- ④ 藪田坦、(報告) 私のクザーヌス研究を
顧みて、日本クザーヌス学会第27回大
会、2008.12.13、仁愛大学

[図書] (計3件)

- ① 藪田坦、法蔵館、『親鸞 他力の宗教—
ドイツ講話集—』、2007、110
- ② 多賀 茂・三脇 康生 編著、京都大学
学術出版会、『医療環境を変える—「制
度を使った精神療法」の実践と思想』
2008、400
- ③ 藪田坦、法蔵館、『現代の人間と宗教—
—仏教への道』、2009、vi+186

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藪田 坦 (SONODA TAN)
仁愛大学・人間学部・教授
研究者番号：40047072

(2) 研究分担者

宗 孝文 (SO TAKAFUMI)
仁愛大学・人間学部・教授
研究者番号：10067613

(3) 研究分担者

三脇 康生 (MIWAKI YASUO)
仁愛大学・人間学部・准教授
研究者番号：40352877